

ほたれ歴史通信

第31号
2004.6.1

欲しい。

・四月七日入学式での校長先生の話。

合格の日の感動と新鮮な気持ちをいつまでも持ち続け、これから三年間の生活を価値あるものにして頂きたいと思います。「花いろいろ 草おのおのの 手柄かな」という俳句があります。また世界に一つだけの花といふ歌があります。その歌詞の中に「そうさ 僕らは世界に一つだけの花 一人一人違う種を持つ その花を咲かせることだけに 一生懸命になればいい」とあるように皆さん一人一人が素晴らしい可能性を秘めているのです。

高校生の生活のスタートに当たり、皆さんに二つの事を希望します。

大子一高と大子二高の統廃合により、地元住民の注目のもとに、平成十六年四月七日、新しく大子清流高校の入学式が行われました。入学式のお話の要約など新入生を迎える学校の心構えを紹介いたします。

- ・三月二十三日合格者説明会での教頭の話。

高校時代は、青春時代、青年期ともいわれ、子どもから大人へ、体も心も大きく変わる時期です。自分という存在を考え、自分の生き方を考える高校時代を迎えるみなさんに、二つのことをお話しします。

一つは、この世にたつた一人しかいない自分というものを大切にして欲しい。自分はどう生きればよいのか。自分の夢をたくさん持つて欲しい。自分の夢を実現するためには、どんな進路をとればよいか。そのため、今、自分は何をなすべきか、考えて欲しい。夢は自分を変えます。夢は、目標を与えてくれます。夢は、今、自分がどのような生活をすればよいのか考え、勇気を与えてくれます。

二つめは、土曜日、日曜日の休日を大切に過ごして欲しい。この一週間を反省し復習し、次の一週間への目標を決め予習して欲しい。頭を切り換えて、自分は高校生なのだと、自覚して

一つは、「自分の生き方を考えて生活して欲しい」と言うことであります。「人のために尽くす」生き方を考えて欲しいと思います。そしてその為には、どのような職業に就き、その職業に就くためにはどのような勉強が必要かということを考え、自ら進んで学び自ら主体的に判断して行動して下さい。

二つには、「人として豊かなところ」を身につけて欲しいということです。皆さんを取り巻く現在の環境は、「服あふれ 靴あふれ かごにパンあふれ 足るを知らざる国となり果つ」という短歌のように、物が豊富にあり恵まれた環境にあるのではないかでしょうか。皆さんにはもう少し、苦労を体験して欲しいと思います。家庭での手伝い、自然での触れ合い、スポーツ活動、勤労体験、ボランティア活動など多くの直接体験を積んで下さい。不便、不自由、不足の体験を積んで下さい。そのような体験を通じて本当の自分を知り、自立心や他者への思いやりの大切さなどを知るものです。一度と無い人生です。皆さんの三年間が実り多いものであることを願っています。(野内)

満州移民「大子町分村第九次冷家店開拓団」② ～飢えと疾病に耐えながらの引き揚げ～

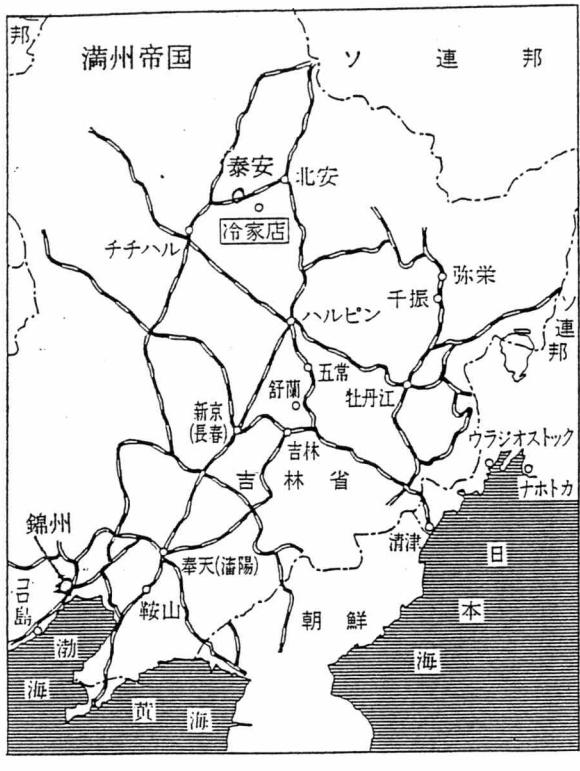
昭和十五年一月、北満の地に大子町分村第九次冷家店開拓団の先遣隊十五名が、団長菊池正修（五一）引率のもとに入植した。同十七年には本隊の入植や家族招致が行われ、団員の家族や花嫁が渡満し、大子分村はにぎやかさを増した。

大子町分村開拓団の農業經營が軌道に乗りはじめ、自立經營を目の前にした昭和十九年頃になると、戦局は悪化し、開拓団内では団員が軍隊に動員され、大子分村にも暗い影が濃くなっていた。昭和二十年八月七日のソ連の参戦は、開拓民に大きな衝撃であった。開拓団内の残留男子は数名くらいしかおらず、

婦女子や幼い子どもをもつ母親達は、日本軍に恨みをもつ者やソ連軍の進入に大きな不安を抱えていた。昭和二十年八月十五日、日本は無条件降伏し、満州帝国は崩壊し、開拓に終止符がうちたれた。大子分村開拓団が日本の敗戦を知ったのは、二日後の八月十七日、終戦によつて軍隊から帰団した団員から聞かされてはじめて知つたという。

婦女子だけではできなかつた避難地への準備は帰団した団員と隣接の開拓団の応援を得て行い、八月二十三日本部を出发し集結場所である泰安へ向かつた。そこから拘留生活をくり返しながら北安、ハルピンを経て、九月三十日難民を収容する新京郊外の元日本軍将校、下士官の大官舎群のある南大房身の宿舎に入った。男子は北安での拘留が解けず、解除命令が出たのが九月三十日、北安からハルピンを経て十月二十九日新京に到着し、南大房身にて家族（婦女子）と合流した。この日より翌二十一年七月十日まで南大房身の宿舎にて辛い収容生活がはじまつた。

南大房身では食料不足で栄養失調になり、不衛生が加わつて伝染病や冬の零下四十度という極寒の中で死んでいく人が多く、大子の開拓団員の家族からも犠牲者がでた。大子開拓団員の引き揚げ途中の死者数五十三名のうち四十九名が南大房身の収容所で死亡している。幼児の死亡が多く、そのほとんどが発疹チフス、ハシカであった。成人者は肺結核、脳膜炎、消耗症などによる死亡である（『冷家店開拓団死亡者名簿』）。冬は土が凍結し、死体を埋める穴が掘れないで夏のうちに用意された。家族がいる者は衣服を着て埋められるが、家族がいない者は衣服を脱ぎ取られ裸で埋められた。宿舎にはロシア兵も入ってきた。母親はおびえている子ども達を抱え、必死で保護した。ロシア兵は自動小銃を発砲し



冷家店 泰安 錦州（錦県） コロ島の位置

ながら母親を脅し、衣服の襟や帯に隠しておいたお金をとつていった。若い娘達は身の安全を考え、髪の毛をぼさぼさにのばし、顔を黒くし、男の容貌を装っていた。(平成十三年七月三十日北浦町訪問調査、齊藤ユミ氏、吉沢里子氏、堀田くに氏の談話から)

翌年六月に入ると日本への引き揚げがはじまり、開拓団員を喜ばせた。団員は、船中での食料不足を予期し、コウリヤンの粉を水で溶いて乾燥させ、長期保存食に備えた。

昭和二十一年七月一日、早朝大房身を出発し、七月十三日引き揚げ乗船までの集結場所である錦州(錦県)に着き、北大営の宿舎に入った。七月二十日乗船港コロ島へ向かって出発、夕刻乗船し、二十四日の朝佐世保に入港した。二十五日検便検査があり、その結果、コレラ疑似者がでたため、港外にて一週間の隔離・停泊をした。

船中の食事は、一日二食、湯飲み茶碗よりやや大きめの器の中にスープとだんご二個入つただけの食事であつたから、常時空腹につきまとわれていたが、南大房身を出るときにトウモロコシで作つた粉餅のようなものを隠して持つて行つたので、それを少しずつ食べて空腹を補つた。またこの年一月に生まれたばかりの赤ん坊がいたが、母親は母乳が出ないので、「乾パン」を自分の口でやわらかくかみ碎き、液状にして食べさせた。骨と皮ばかりの赤ん坊であったが丈夫な大人に成長した。

八月十八日佐世保港外で停泊中の引き揚げ船に、大子町助役黒崎甲子郎と齊藤章次郎が歓迎の慰問に来船し、開拓地から出征した佐藤允、後藤一郎、中野清の三名は、既に帰還しているという知らせを受けた(『引き揚げ日誌』)。

一方、本土上陸を目前にした八月十二日山田出身の長山佐武郎(四五)が病死し、ついで八月十九日冥賀出身の菊池勘一の妻しま(三三)が病死した。

八月二十一日やつと隔離が解けて佐世保港に入港した。上陸

後は直ちにDDTによる消毒やコレラ菌、発疹チフスの予防注射があり、それをすませて引き揚げ宿舎に入つた。

八月二十三日佐世保を出発し、東海道本線、常磐線、水郡線経由で八月二十五日の夕刻(午後八時ごろ)常陸大子駅に着いた。齊藤ユミさん達は、當時を思い出しながら「大子駅前では親戚の人達や町の人達が大勢迎えに出てくれていた。残留孤児を出さずに、また、無事に帰れたことがうれしくて涙が止まらなかつた。」と思いをこめながら語ってくれた。

引き揚げ後は、親戚に身を寄せたが、いつまでも泊まつてはいられなかつた。日が経つにつれて気まずい思いが先に立ち、昭和二十一年十月初旬(十日ごろ)、内原へ戻り、義勇軍養成訓練施設であつた日輪兵舎に入居した。内原では宿舎近くの河和田地区の農家へ働きに行つた。大きい子供も親と一緒に働きに行き、小さい子供の面倒を見た。食糧不足の時代であったから、手間賃は昼食付きで、お金の代わりに米や麦、野菜、芋などの農産物をもらい、家族の食料を補つた。

日輪兵舎では入植先を決めなければならなかつた。終戦と引き揚げという生活苦の中で、帰農するからといって明日への農業に対する希望があつたわけではなかつた。今、家族が生きて行くには、いかに食料を確保しながら生きるかを考えることで精一杯であつた。そのための入植先をどこにするかが深刻な問題であつたから、佐藤允、齊藤福男らを中心に入植先の検討が行われた。引き揚げ仲間からは、北海道、布拉ジルなどの声もあがつたが、冬のきびしい北海道や海を渡つての海外への入植には、誰もが反対であつた。いろいろ話しあつた結果、大子分村引き揚げ家族みんなが一緒に入植できる近いところに落ち着いた。最終的には県や関係機関の指導があり、昭和二十二年三月七日、行方郡武田村(現北浦町)小貫地区の未墾地に入植した。

旗鉢三と櫛鉢大臺灣御持所

飯村尋道

旗鉢三は、豊田の中郷と北山沢の間にあつて海拔二六八メートル。西風を立てた様な急峻険阻な山で、山上は馬の背の如く南北に凡て三メートルと廣く、極北固難といひのは中央にそれぞれピーグがあり、中央のピーグが最高峰で、ここに神武天皇御持所の石祠が鎮座してゐる。

旗鉢三は、「御壁坂上田村櫛鉢往の母、此處に住むて櫛鉢を平げ旗鉢を建て以て戰捷を祝せし近」(坂上田村『櫛鉢』)の故事に因み名づけられたといはねども。

嘉永六年(一八五三)十一月の二十日に神武天皇御持所を設置したのは、中郷の生んだ幕末の尊皇志士坂上田村櫛鉢である。櫛鉢はすでに同母町には寄神山(太神山)、海拔七百メートル)に忠義團太神御持所を設置してゐる。

櫛鉢は、文政九年(一八一九)冬櫛鉢坂上田村に生まれ幼少にして豊田天功に学ぶ。既じて天保十年(一八二九)、豊澤村中郷の修驗體寺院の養子となる。時に二十一歳。時あたかも内憂外患の幕末騒動時、一族養子をも顧みず故郷を離し国事に従事。戰火鍔載の間に徘徊、獄舎に繋がれ刑窓に幽し、櫛鉢御持所を嘗めて一身を國に捧げたが生徒全つて維新を渴え、明治十一年、二十一歳をもひて歿する。

櫛鉢は、当時、北山澤村大草の豐野源次兵衛正押の旗鉢三の三間を回人よつて修理し、一體に六尺の十幅を縫わ、その上に足組のローブである「正押」に取扱ひた」といふ。まだ、「日本ノ山の神

標木を建てたといはづ。櫛鉢の建てた標木は「正押御持所」の表札で『神武天皇御持所』と大書してある、櫛鉢の歿後も昭和四十一年櫛鉢は斬祓、一回の祭典が廻らねだが、毎年はいわゆる斬祓に行なうに放置され、標木もこゝしが折れ缺て十幅のみが残つていた」(今澤春友『櫛鉢修驗田村櫛鉢』)と云ふ。

昔は焼れて大正十二年、北山澤の山路の入、谷田部源次郎は神武天皇の御夢を感つて、旗鉢三の十幅の上に石の碑の御跡を立てる。源次郎は旗鉢御持所の贊同を得るとともに、櫛鉢源次郎(櫛鉢の孫)の櫛鉢御持所に改めて旗鉢三上を御持所として、標木跡に石碑を建立した。

石碑は、櫛の御紋の彫られた十幅破風の流連つて、旗鉢から圓柱形で高さ四十五センチ。左側面には風化がひどく『大正十二年正月廿二日卯辰』と読める。右の脇を外し右側を彫へて新しくイシクガ一本書きのねでいた。

私が某年時々の昭和四十六年正月に、旗鉢三を體會した時は石碑の中に一枚の由木の標木がありて、その表札は『神武天皇』、裏には『大正拾參年正月廿二日櫛鉢』、発起人櫛鉢御持所、申語人谷田部源次郎、體上田櫛鉢正門、櫛鉢平櫛」と櫛鉢の御持所やかに書かれていたが、その標札も朽ち果てたが、今は昭和だいだ。

この三上の石碑などつてて、櫛鉢御持所の正門櫛鉢正門によれば、「毎年三月の櫛鉢御持所に於けると云ふが、『正押』が御持所か

武天皇の祭田には、山上に上つて御膳、投げ餅をもつた。子供のがヒラッたり、部落に分けて神膳にあげてから食べた。町の隣に人や年寄りは旗鉢山に上り、立路の八重籠ねむの神武天皇やまの石の所でヨリキアゲをした」と云ふ。そもそも昭和の初めの頃まで、以後、途絶えてこる。

懲警険阻な旗鉢山は強社遙回な入でも難儀する。そのために上に上るやうむとて参拝地じゃぬつたが、立路からの参道の入口には、『神武天皇』の石塔が建つてゐる。石塔の右端は、礎石を含めて高さ二メートルで、中央には『神武天皇』、その左端には『國ノ院上づべ』『昭和十三年四月謹』とある。この石塔は、山上に石祠を建てた谷田部源次郎が「田代で石を運びて立てた」（谷田部ヤスセさん談）といひ。

今回の旗鉢山は、北吉沢の立路の『神武天皇』やまの石塔前からの参り。『國ノ院上づべ』の石塔は斜面すいばりで被沢困憊、ナリ・クタギの雜木の躰斜面を画に飾り、三十分程で脇の脇のよつね三面に立つ。惜しこかず、中嶺側はヒヒキの造林地と化し全く視界は利かず遙拝は不可能。躰斜く木立の中に神武天皇遙拝所の石のねぐらいやらと寂しく廻つてこる。

思えば、昭和廿六年四月十四日、最初の旗鉢山探訪謹。天神の「弁慶の腰舟わむ」の話をしておき、中嶺三を渡つて山に出て旗鉢山に立つた時の感動を語る記録を読むが、今も強烈かつ鮮明に腦裏に焼きついている。当時は肝風を立てたよう

な山のものが、中嶺・南・西の各面の山頂地のカヤバだったのだが、山上からの謹跡極めて稀。朝はいいが夕暮れになると、豈れどどの谷間に中嶺の無数がマツチ箱のように散在し、その間に何じ田村賀林の設置した伊勢國太神御御拝所の太神御山が、山の間にうな近いに大きく立つてだかっていながら山腹もれた。謹跡は、約三十数年前の旗鉢山の面影は今はなし。ヒヒキの大木が三本立つて、全く謹跡が隠けない。謹跡の一帯はつまらぬ山林になつた。ヒヒキの大木



旗鉢山頂の神武天皇遙拝所の石祠（大子町中郷・北吉沢）

金山沢鉱山（続）

大森政夫

笠井カノさんは語つた。

背負い出す箱には、背負綱として自転車のタイヤが付けてあつた。坑道には、所々に小型のカンテラが吊るされ、灯りを頼りに重さ十キロの鉱石箱を背負い、地下から坑口まで運び出した。途中、百三十段もの足場であるハシゴを昇り降りしなければならなかつた。これに耐えながら、毎日午前七時から午後四時まで働いた。給金は一日四十銭であつた。

事務所の脇に精鍊所が建つた。昭和十四年のことである。それまでは鉱石をかますに入れ、馬の背に積み、柄原坪の広い道まで出して日立鉱山へ送鉱していたが、精鍊所ができるとここに鉱石が集められた。

金山で働いていたのは、鉱石を掘る人十人十三人、精鍊所で働く人五人六人、他に長屋を建てたり坑内の足場等を作る大工、土工、雜役係の人達とその家族を合わせると七十人位いた。なかには、大沢小学校へ通つてゐる子供もいた。手古屋の山の中には七棟の長屋があつて、それは賑やかであつたといふ。

金山で働いていた人達は、地元の人のかに久隆、高部、山方、大宮、黒沢、金沙郷の出身者であつた。

精鍊所には三つの沢から水を引き、直径二間ほどもある水車が回つて、五本の杵と鉄製の臼が鉱石を碎いた。水車を利用した水力タービンが設置され、発電して事務所や長屋に送電していた。

精鍊所と坑口の中間地点、すなわち路が二手に分かれる山際に選鉱場があつた。坑口まで背負い出された鉱石は選鉱場に集められ、選別された。選び抜かれた鉱石は、厳重な管理のもとで精鍊所へ運び込まれた。ズリは、ここで処分された。

精鍊所へ鉱石を背負い運ぶ人は、限られた人であつた。カノさんもその一人で、午後四時から午後七時まで残業した場合は、通常の倍額の八十銭が支給された。

それにしても、重さ十キロもある鉱石を背負いながら地下から地上へと運び出す労力、毎日ではないにしても午後四時から午後七時までの超過の仕事など、男顔負けの重労働をやってのけたのは驚くべきことである。

しかし、鉱山事業が軌道に乗り、さらに開鑿しようと計画を立てていた昭和十八年、太平洋戦争が激しくなるなか金山整備令が発せられ、閉山するに至つた。この時の状況について、前出の記念碑には次のように記されている。

「政府ノ方針ニ依リ全鉱道整備ノ指令ヲ受ケ国策ニ順応シテ茲ニ閉山ノ止ムナキニ至ル、金田氏及其ノ関係者力前後十五年ノ長キニ亘リ産金報國ニ全力ヲ傾倒シ苦辛經營ノ經緯ハ真ニ筆舌ノ能ク盡ス所ニ非ス」（以下略）

カノさんに当時の話を聞くと、十キロもある鉱石を入れた箱を背負い、耐え忍んだことを忘れることがなく鮮明に覚えていた。それどころか、水銀を使って精鍊したことでも断片的に覚えていたのである。しかし、話しているカノさんからは想像もつかない出来事のような気がした。

時々、カノさんはお孫さんを連れて手古屋沢をたどり、金山跡まで散歩するという。金山跡に立つカノさんは、お孫さんにどんな想いで、何を語りかけているのであろうか。

一橋様京都御用日記 一

召集された郷士達は上京してからは御所（天皇の住む京都御所）の見回りが主な任務であり、まさに慶喜の禁裏守衛の大手な御用を勤めたのであった。

やがて、文久三（一八六三）年に都を追われた長州が、藩公のえん罪を訴えるとして、大軍を引き連れて京都に迫るに至つて、七月、ついに禁門の変（蛤御門の変）となる。この時、水戸の郷士達は、遊撃隊として戦いに参加、歩兵百余人、講武所小筒組五十人、別手組百人などと共に御所防衛に当たつたのである。かなり苦戦したが、慶喜の活躍、薩摩藩の協力もあって無事守り通すことが出来た。あの歴史的に有名な蛤御門の戦いには、大子地方の郷士達も参加して戦つていたのである。

この頃、水戸藩では藩論が二分し、幕府に攘夷を迫る尊攘派と、幕府の開国の方針を是とする佐幕派とに対立していた。戊午の密勅・齊昭謹慎などが更に対立を深めた。尊攘派のうち激派と呼ばれる一派が加波山に依り旗揚げし、幕軍がこれを攻撃する事態となつた。この一派は天狗党と呼ばれ、以後各地を転戦して大子に入り、態勢を整え元治元年十二月、京都の慶喜に心情を訴えるべく各地の幕軍と戦いながら京都に向かつた。出来るだけ戦いを避けるために山道・間道を通り、北国の寒気に耐え、苦難の末、越前まで西上して行つた。

「天狗來る。」の情報に京都の人々が動搖し、朝廷からの「天狗を討つべし」との命令に、禁裏守衛の職にある慶喜は、北越に出兵せざるを得なかつた。

この時に遊撃隊も慶喜に従つて出兵した。元治元年十二月から翌慶応元年一月にかけた真冬であつた。

天狗党はもともと慶喜に攘夷の心情を訴えるために西上した

ので、慶喜の軍と戦う意志はなかった。天狗党が降服したので戦いはなかつたが、天狗党の処置を幕府に任せたため、慶喜の最も信頼していた武田耕雲斎はじめ八百二十名中三百五十名余りが処刑（死罪）されるという結果になつた。このほか遠島百三十七人、追放百八十四人、その他など厳しい断罪であつた。

北越から帰つた後は、孝順子様（水戸藩主の弟、京都警衛に

当たり過労のた

め十六才で死亡）

御廟所御番役と

なり、十二月か

らは御所警備上

重要な凝華洞御

守役を仰せつか

り、慶応三年（一

八六八）十二月

迄約二年間続い

大阪へ退き、鳥羽伏見の戦いに敗れて、江戸へ帰ってしまった。

遊撃隊の郷士達には一橋様守衛という当初の目的は既に無くなつていた。その上、朝敵と言うことにもなり兼ねない状況になつてしまつた。

しかし、水戸藩が勤王の志厚いことから、攻撃は免れ、一月、泉湧寺御陵の警護を言い渡された。遊撃隊本閑寺派の水戸藩士達は水戸に帰ることを願い出た。水戸が佐幕の諸生党によつて占められているので、これを排除し勤王の実を上げたいという「除奸反正」の申請をして容れられた。朝廷から「奸人共嚴罰を加え・・・」と言う勅書を受けることができ、水戸に帰る正当な理由が手にすることができたのである。

一月二十四日京を出発、途中、官軍特に薩摩藩の報復を恐れ「勅定」と書いた札を立てた唐櫃を守つて肅然と行動し、二月十日江戸到着、諸生党を排除して、三月十六日水戸城に入ったのである。大子から上京した者も殆どがこの時に帰国した。

帰国後も、藩内は天狗諸生の争いが続き、水戸を脱出した諸生派を追つて下野方面に出兵した。やがて、諸生派は水戸に逃げ帰り、更に各地に転戦して、結局最後は討ち取られたり、降服して争いは終わつた。

しかし、この間諸生派が優勢の時は天狗派を弾圧処罰し、天狗派が優勢になると諸生派の家を打ち毀したりしている。未だに、領内にはその跡が残つてゐる家もあるといふ。多くの人材が失われた悲しむべき抗争であつた。このため尊皇攘夷の中心的な藩でありながら、明治維新になつてからも、水戸藩からは政治の中心に活躍する者は殆ど出なかつたのである。

ともあれ、この大子地方にも、幕末の戦乱のまつただ中に、京都に於いて活躍した人達があつたのである。

【資料提供 高柴柏弥四郎氏】

(石井喜志夫)

終

【編集後記】

五年前、本誌十号記念を発行した後に、編集人であった井上和司さんが異動になりましたが、この四月、吉成英丈さんが町立学校給食センターへ転出されました。奇しくも、三十号を記念して十六頁立ての特別号を発行した後のことでした。

吉成さんは、本誌の成長に多大な貢献をしていただきました。ゲスト執筆者と読者の開拓に熱心に取り組まれた結果、本誌のすそ野が大きく広がつたように思います。四頁立てが通常であったのに、最近は増頁の場合が多いのもその何よりの現われです。また、前号で小澤さんが、本誌に掲載した論稿を中心に『大子風土記』を編纂、発行する予定であることを述べられました。が、この企画も吉成さんの発想によるものです。刊行に向けての準備が進むなか、吉成さんには、引き続き強力な支援をお願いしておきたいと思います。

後任として赴任されたのが、鈴木徹さん。本誌のさらなる成長に一肌脱いでいたくことを切に願うばかりです。(斎藤)

編集人

斎藤

典生(茨城大学人文学部)

野内

正美(茨城県立大子清流高校)

石井喜志夫(元 教員)

小澤 圭彦(元 教員)

吉成 英丈

(大子町立給食センター)

鈴木 徹

(大子町社会教育課)

編集発行

遊史の会

大子町立中央公民館歴史資料室 気付
久慈郡大子町大字池田二六六九番地